信仰の「成熟」と「深化」

——ある青年期女性の自己実現プロセスを通して——

三浦　亜子

はじめに

明治以降，本格的に日本にキリスト教が入ってきて，およそ140年経つが，従来から日本にはキリスト教が根付きにくいということが多く指摘されてきた。様々な要因の中でも，もともとキリスト教が中近東で生まれたオリエントの宗教でありながら，日本に主に入ってきた大方のキリスト教は，西欧を通って西欧化されたキリスト教であったことは大きい。なぜなら日本土着の宗教性は，多元主義的，習合的であるのに対して，西欧化されたキリスト教は，あまりにも一神教的排他的であり，日本人に広く受け入れられるには，逸脱しすぎていたからである。

しかし，逆に意識や理性によるアプローチがしやすく，日本的で曖昧な精神文化の弊害の中でもがき苦しんでいた人間にとっては，苦しみの意識化を促し，日本的な呪縛から自由になって，新たな救いや希望を得られたであろうし，信仰を自覚的・能動的に受け入れやすいところがあったのではないか。少数ながらもキリスト教の真髄に触れ，帰依してそこにとどまったクリスチャンたちは，子，孫へと信仰を継承して行った。もともと西欧化されたキリスト教も，長い年月をかけて西欧で土着化されたものなのであり，だとすれば，日本でも，こうした代を重ね継承された信仰は，次第に深化・成熟し，土着化して日本人の宗教性と溶け合い，そこから新たな精神性を創造していく力となるはずである。

本論文では，学生相談室に訪れた，代々のクリスチャンの家庭に生まれ育った，青年期女性のたどった実際のプロセスをもとに，引き継がれた信仰が，今に生きる個人の精神に，実際にはどのような変化や力をもたらし，影響を及ぼしているのか，具体的に考察する。

事例の概要

○クライアント：Kさん（以下Cl），21才，大学3年生，女性，

○主訴：無気力，大学へ行けない，（後から異性の問題，信仰の問題）

○問題の経過：不本意入学。大学に入ってから自分自身がうまく立ち回れない変な感じがずっとあった。1年の後期あたりから，大学へ行くのが面倒になって，現在はほとんど行っていない。クラスに何人か心を許せる友人がおり，その友人の助けを借りて，テストやレポートをこなし，何とか単位はぎりぎりの状況。教会活動やバイトはやれているが，それで疲れ切ってしまい，その他の日はアパートにこもっている。生活のリズムも乱れがち。心配した友人の勧めで来談。家族は今のClの状況について知らない。

○家族：サラリーマンの父，パート勤務の母，社会人の兄の四人。現在は実家から離れて，アパートで一人暮らし。

○生育暦：生育的な問題，病歴等なし。末っ子で可愛がられて育った。幼い頃から自我のは

っきりした子と言われていた。明るく活発な部分と，一人遊びや空想好きの部分と両方ある子だった。家族関係は良好。プロテスタント系のクリスチャンホームで，幼少時より家族そろって教会へ通っていた。高2時に受洗。親元を離れた現在も，同じ教派の教会に通い，奉仕活動を熱心にしている。

○印象・所見；中肉中背，大学生らしい清楚な服装，上品で美人。外見はいかにもクリスチャンという固い感じだが，話し出すと表情が豊かでチャーミング。知的能力も高そうで，言語化していく力もありそう。

面接経過　X年10月～X＋3年3月　#1～52

（「　」はClの発言，thは筆者）

Ⅰ期（#1～7）「躓き」の中へ，無意識への下降

厳格なクリスチャンとして固く生きてきたClが，異性との関わりで「信仰に躓き」，これまでの一面的な生き方が内側から揺さぶられていた時期。

段々状態が悪くなっていると友人に言われ，1回目はしぶしぶ来談。「もともと入りたかった大学ではない。…しかし，本当は受験するときから自分の進路をどう決めていいか，分からなかった。あいまいにしていたつけが，回ってきたのだと思う。」（#1）この時点でthは，だいたいの情報からClがアパシー状態にあると考えた。バイトや，教会活動も熱心にしており，大学でも最低限の友人関係があり，単位もぎりぎりながら取れていることからも，自我は基本的には健康と思われたが，抱えている問題は大きそうで，時間のかかる人かもしれないと予想した。（数ヵ月後改めて自ら来談。今まで一人胸にしまってきたことが語られ出す）「この頃は教会も休みがち。実は…1年の時に恋愛でトラブルがあって…。相手（丈）は派手で軽くて，全く好みでもなく，自分は乗り気でもなかったのに，あいまいにしていたら，引っ張られるようにして付き合うことに。複雑な生い立ちの人。一時期楽しかったこともあるが，価値観も合わず，合わせていることが段々苦痛に。そんな時に突然丈から『お前が悪い』と振ってきた。だめになる時は，私から振る時だと思っていただけに，まさかと，正直先手を打たれてショックだった。同じサークルで，その後もずっと顔を合わせてしまうので，大学へ来るのが苦痛になって行った。」（#2）「付き合う人は結婚を前提とした人と決めていたから処女を貫くつもりでいた。しかし強引な丈との付き合いで，ぐらつき始めた。彼の部屋に行ったときに求められ，最後まで行かなかったものの，妙な気持ちに…。アパートに戻って冷静になって考えたが，自分は固すぎるのか悩んだ。それからしばらくして丈から別れを告げられた。自分が固すぎる，変わろう，彼のため努力してみようかと感じ始めていたときだけに，一体何だったのか。プライド傷つけられ悔しい。」（#4）「丈とのことでは傷ついたが，（体を最後まで許さず）自分を守り通せたことは救いだった。その後自分を挽回したくて，大学院進学を考え出し，（同じように進学を目指す人の集まる）研究会に入って勉強に励みかけた頃，その集まりを通じて，南米からの留学生（セト）と出会う。異文化への興味と英語を身につけたくて，また何となく付き合うことに。セトはクリスチャンでもあり，自国にフィアンセもいると聞いていて安心していたのに，誘われるまま彼の部屋に行った時に，キスされてしまう。その場では驚いて，何も言えず。後日辞めて欲しいと伝えたのに，何だかまた部屋に行くことになり，結局丈のときと同じ状況に。でもセトは丈よりも落ち着いていて，ずっと包容力のある人で，リードされ守られている感じだった。いけないこととは感じつつ，礼拝のたびに，またセトと会う前には『止められるようにしてください！』と必死で強く祈ったのだが，逆に抗えない（性の）魅力に負けてしまって，会うことを重ねて行った。一人になると，汚れていく罪深い弱い自分に苦しみ，礼拝に出ると，汚れている自分をさらに強く意識

してしまい，いたたまれない気持ちで辛くなっていった。幼い頃から教えられてきたように祈っても，神は全く助けてくれず，神も教会もクリスチャンも『うそっぱちだ！』と感じるようになっていった。苦しかった，その時は自分にとって真っ暗い時。神に対するイメージががらっと変わってしまった。」「セトと会うことの喜びと苦しみがピークに達した頃，ちょうど彼の帰国が決まり，別れることにした。正直ほっとしたが，数ヵ月後，彼の筆跡でサンタクロースからの暖かいクリスマスカードが届く。セトは本当にいい人だった。Clが固すぎてだめだった。」（#6）「教会には行かなくなったものの，悩みは深まった。聖書を読んでも，女性に対するパウロの言葉など，突き刺さって苦しくなる。クリスチャンで無い周りの人間は，恋愛を当たり前のこととして楽しんでいるのに，自分は一体何なのか。“清い付き合い”を貫いて，良いクリスチャンホームを築くということがいつも頭にあった。そのために私はもてるほうだったが，いつもどうしてよいか分からず，気づかぬふりや，鈍感なふりをしてきた。よく友人から「シスターみたい」「巫女さんのよう」といわれるようになってた。Clから見れば，俗世のみんなのほうがおかしい，堕落している，間違っていると感じてきたが，Clのほうが宇宙人のようだったと今は思う。」「（教会批判）教会こそ罪人の集まり。牧師は特にひどい。お金や地位にさもしく，難しい説教をして自分に酔いしれている。他人を批判し，弱い優しい人，本当に求めている人を下に見て傷つけている。教会員も教会ではお酒もタバコもやりません，と済ました顔をして，見えないところでこそこそやってる。特に教会を出て行った人に対しては，『信仰が足りない弱い人』と手厳しい。キリストの本当の教えから隔たってしまっている。Clも教会の中にいたときは，出て行く人を同じように批判的に見ていた。まさか自分が出て行くことになるとは。今Clも同じように思われているだろうし，辛い。」（#7）

Ⅱ期（#8～15）「殻」を破って・クリスチャンとして・日本人として・女性として

一面的で固かった信仰の「殻」が破れ，眠っていた新たな内的なエネルギーや“自分”が動き始める時期。クリスチャンとして育てられる中で，日本的な宗教性から切り離されてきたこと，女性としても「良き婦人像」に縛られてきたことに意識の光を当てて行く。母教会，教派の抱えていた見えないゆがみや問題もさらに意識化されてくる。日常的にはバイトや研究会への参加など最小限のことはこなしつつも，それ以外は大学にも行かず，ほとんどアパートに引きこもって，昼夜逆転の状態が続き，面接も定期的にこれないことがしばしば続く。ニューエイジ心理学や仏教の本を読みふけるなど，宗教と性との問題を追及し続ける。また，所属していた教会，派以外の神学の研究者やいわゆるアウトローのクリスチャンとも出会い，「クリスチャンと言ってもいろんな人がいる。自分は本当に純粋培養だったし，井の中の蛙だった」（#10）ことが分かっていく。

「夢１－舗装されたような固い地面が割れて，噴水のように何かが噴出している。それはよく見ると，キリスト教の象徴や，その他のいろんな象徴のようだがすごい勢いで噴出しているのでよく分からない。（連想）よく分からない。尽きることなくどんどん噴き出てきていたのが印象的。」（#8）哲学や人類学，宗教学への興味が出てくる。その中で，ユングを知り『ユング自伝』を読む。「他の本は難しくてよく分からなかったが，これはよく分かった。ユングもクリスチャンとしてClとよく似た体験をした人。結局Clの母教会も，『体験のない信仰』が一番の問題だったのだと思う。」（#11）「両親は特別厳しく教育したわけではなかったと思う。でもどうしてClはこんなに固くなってしまったのか。両親とも性を強く抑圧してたことは確か。それと神道や仏教を強く否定していた。子供の頃楽しいはずのお祭りも，『本当は行ってはならない』ところという後ろめたさをいつも感じ

ながら行っていた。七五三もしてもらえなかった。近所の子がきれいにお化粧して着物を着て嬉しそうにしている姿を見てすごく驚いたし，悔しかった。その日かなり長い時間家でごねて，泣いたことを覚えている。親には『間違った神様に御参りをして，子供にあんな格好をさせるのはおかしい』と怖い顔で叱られた。先日街でちょう七五三の子供の姿を見ていて思い出した。着飾った子供たちは道行く人に，見られて，祝福されて。自分にはこういう体験が無い。日本人として根無し草の自分。」（#14）「夢２－（声）創世記のアダムとエバの物語は女性にとってはのろいである。（連想）英語の文章もでていたような。“curse”という発音が印象に残っている。自分が理想としていたクリスチャン像，婦人像は一体何だったのか。キリストはすごく女性を尊重して大切にしたし，本来キリスト教では男女は平等なはず。しかも西洋から伝わって，来たものなのに，教会では依然として，日本的男尊女卑。ほとんどの牧師は男性。大事な運営は男性。女性達は陰に回り，お茶出しや，その他雑用。男性たちを支えるという役回り。貞節で控えめで賢くて優しくて，受容的であることが女性に求められる。しかも『神に従う』『信仰』という大義名分が振りかざされ，反論や有無を言わさず，当たり前のように強要されてきたように思う。でもこれを鵜呑みにして生きるとしたら，人形のような女性になってしまう。これは現代の女性の生き方に合っていないし，女性の『人間性』を抑圧し否定し，現実の生きる問題や人間の苦しみに答えるはずのキリスト教のあり方からずれている。今思い返すと無性に腹が立つ。パウロの言葉も追い討ちをかける。しかし反発しようにも，聖書の言葉だから絶対なのだ，という感覚が，自分を苦しめる。これが本当にキリストが目指していたことなのか。」（#15）

Ⅲ期（#16～34）　偶像からの解放，象徴を生きる

さらに無意識の深い層へ内的作業が進むにつれ，Clの内奥の宗教性に触れられるようになり，外的にも新たな信仰の導き手（カトリックの神父）と出会う。そして自分の中に植え込まれてきた，造り物の神のイメージ，偶像を意識化できるようになる時期。日常的にはカウンセリング以外大学へは全く出て来れなくなり，卒業延期となる。

「ごく幼かった頃，私は神ととても近しかったと思う。神と言ってもキリスト教の神だったのか，もしかしたらいわゆる日本の八百万の神だったのかも知れない。日本人としての当たり前の宗教性の中で，でもある意味自分はそこで生き生きと生きていたのかもしれない。それが気づいたらいつの間にか遠くに切り離されてしまっていた。宗教教育によって？だとしたらとても恐ろしい。でも一方で，私は家庭の中で，教会の中で確かに大切にされていた。育ててもらってきた。だから余計に入り組んでおり，複雑。反論したり，拒否したりしにくかったのだと思う。こんなこと今更牧師や教会の人たちに伝えたところで，全く通じないと思う。」（#17）知人の勧めでカトリックの信仰講座に参加。そこである老神父と出会う。「一見して厳しくてそっけないのに，温かい。理屈でなく，私の苦しみを打ち明けたくなる。この人の前に出ると，泣きたくなる。こういう聖職者とは出会ったことがなかった。信仰的な苦しみを，今少しずつ聞いてもらっている。」（#21）「神父の勧めでミサに出るようになった。しかし，どうしてもバタ臭い感じが強く，またプロテスタント育ちの自分には，儀式的なものが馴染めない。何よりも教会員との濃密な関係に縛られることが怖い。ただ，お御堂は祈りの空間として機能しており，ミサ以外の時間開放されていて，必ず数人の信者が静かに祈っている。その姿に励まされる。それに比べプロテスタント教会の礼拝所は，単なる集会所でしかなかった。」（#26）「カ

トリックも同じように多くの問題を抱えてはいるが，地神祭をしたり，七五三をしたり，お守りを持ったり，教会式の仏壇のようなものを許容したり。日本的な信仰心を否定しないで，溶け合おうとしているように感じる。外側から見ているときは，きらびやかなシンボルで飾り立てたり，派手な衣装を着た外国人神父がいたり，いかがわしい集団にしか見えなかったが，それは全くの偏見で，知らないだけだった。難しいことは言わず，未信者の結婚式を積極的に受け入れたり，山谷への炊き出しに出たり，発展途上国にボランティアに出かけたり，実社会のニードにしなやかにそって，多くの人に門戸を開き，具体的に活動していてる。宗教改革ではプロテスタントが，信仰の本質に立ち戻る役目を果たしたのかもしれないが，今ではプロテスタントのほうが，ずっと保守的で，現実からずれてしまっている。」(#29)「夢３－母教会の礼拝に出ている。聖餐式が始まる。いつものようにぶどう酒が配られ，みんなで一斉に飲もうとするその時，『私はこれを飲むことはできない。ここは私のいるところではない』と強く感じ，苦しくなって，そのままそこを出て行く。(連想) カトリックのミサでは，毎回聖餐式が執り行われる。ぶどう酒もパン（御聖体）もキリストの体として象徴化され，神父の手から渡される。私が育ったプロテスタントの教会では，イースターやクリスマス等特別なときだけ，最後の晩餐の聖書の箇所を牧師が読んで，みんなで一斉に飲み，食べるだけだった。シンボルは，聖書と十字架だけしか認めない。それが当たり前だったが，今はもうそれでは立ち行かない自分になっているのかも。カトリックのミサに馴染めないけれど，シンボルを大切にするあり方が，今の自分には必要なんだと思う。」(#30)「夢4－中東のどこかのキリスト教の集団の中で住んでいる。近くで内戦か何か危険な状況が生まれており，住んでいる場所を遠く離れて非難しなければならなくなる。避難場所には，ドーム型の大きな廃屋があり，そこの2階があてがわれる。1階にはすでにイスラム教徒のような集団が入っており，彼らは危険に対して敏感に，柔軟に察知して，すばやく移動してきた様子。(連想) キリスト教の集団は本当に危険が迫っているにもかかわらず，必死で誘導している人々に対し，難しい理屈をこねて，なかなか住んでいる場所を離れようとしない。やっと避難場所にたどり着くが，不平不満ばかり漏らしてぐずぐずしている。その姿を見ている自分はすごくいらいらしている。それとは対照的にイスラム教徒の集団は，柔軟で対照的だった。大きな廃屋の天井は，何かルネッサンスの宗教画のような壁画が剥がれたような後があった。まさに自分の持っていた神のイメージが剥がれたんだと思う。神父とのやり取りの中で，かつてBとの関係がこれ以上進まないように必死で祈ったのは，この『造られた神のイメージ』に対してだったと思う。怖くて神経質で，厳しい神。要求してくる神。自分はそのイメージに緊張し，おびえていた。これは一種の偶像だった。偶像をあれほど強く否定してるはずの，クリスチャンとして，ショックだった。でも剥がれた後どうなるのか，苦痛，不安を感じている。」(#33)

Ⅳ期（#35～42）　回心

生まれて初めて生まれ育ったプロテスタント教会の堅固な“城”を出，「活きた神のイメージ」に触れることができるようになる。その体験を通して，カトリックへ改宗することを決意した時期。日常的には，夢４を報告後，しばらく心身ともに不安定な日々が続く。最低限のバイトは出るものの，異常に神経過敏になって，バイト先で『この頃顔つきがおかしい』と指摘されたり，電車の中で他人の視線が突き刺さるように感じてしまったり，急に涙が出てきてしまう等の状態が続いた。さらに信頼する神父の主催する黙想会に参加する直前，腰を抜かしたような心身の状況になり，まさに現実的に身動きができない状況になる。

「夢５－自分はラストエンペラーになって，

紫禁城を出るところ。門の外に出て，タクシーの中から生まれて初めて紫禁城を外側から眺めている。（連想）映画『ラストエンペラー』の1シーンと同じ。自分は生まれて初めてプロテスタント的キリスト教世界から出たんだと感じた。」「ふらふらの中黙想会に参加。神父との面接で，夢5のこと，丈やセトとの赤裸々な体験をやっとのことで話すと，座っているのがやっとの私を神父が抱きしめ，おんぶしてくれた。気恥ずかしかったが，『造られた神のイメージ』『教えられてきた神』とは全く違う，本来の血の通った活きた神を体験させたいその一心な気持ちが伝わってきて，おいおい泣いてしまった。黙想会の帰り道，自分が最も底に沈んだと思った瞬間，キリストが私を抱きかかえるイメージが浮かんだ。ちょうどピエタのよう。神は外側にいて厳しく常に監視しているのではなく，自分の心の奥の底の底，暗くて，醜くて，惨めで，弱い，最底辺にいることを実感した。」（#38）その黙想会が契機となり，カトリックに改宗する（つまり洗礼を受けなおす）決意をする。「（洗礼式の時）額にかけられた聖水の冷たさが印象に残っている。象徴的に死んで，生まれ変わったのだと実感。」（#42）

V期（#43～52）　あらたな生の創造へ

これまでのプロセスを振り返り，仕上げをしてゆくとともに，信仰をさらに深めていくための，Clなりの歩む道を模索し，歩み始める時期。大学は3年留年の後，取り残してきた単位を取得し，卒論完成へこぎつける。他大学の院への進学を希望するも，受験には失敗。卒後はしばらくその大学の研究生としてゼミ（宗教史）に所属することに決め，無事卒業を迎えたところで，学生相談としての関わりも終了となる。

「久しぶりに実家に戻ったとき，両親に事後報告だが，改宗した旨を告白。今までのことをうまく説明することもできなかったし，両親は以前のClのようにカトリックに対して強い偏見を持っているので，この事実を受け入れることは困難だったが，キリスト教に留まったということとで何とか理解し，受けとめようとはしてくれた。」（#43）「現実的にはカトリックの教会生活に馴染めないままではあるが，内的には神との関わりは全くOKと感じる。」（#45）「夢6－自分は故郷を追い出された難民になっている。たった一人で，あたりはもう暗闇。どこへ行ったらよいか方向もわからない。気がつくと横にユニセフ親善大使の黒柳徹子がいて，手を引いていくつかある難民キャンプのいり口へ連れてってくれる。（連想）アフリカ系の難民がいる感じ。キャンプではいたるところで焚き火をたいており，子供たちがたくさんいて，どこへいっても子供たちに取り囲まれる。歓迎してくれているよう。改宗はしたが，生まれて初めて“城”を出たので，すぐにはどうしたらいいのか方向喪失感で苦しい。夢5の続きのよう。どこに行ったらよいのか迷っている自分の姿。黒柳徹子に連れて行ってもらって，自分に合うキャンプを探している感じ。」（#48）「自分が経験してきたことは何だったのか。パウロも，マルコ以外の福音書家達も実は女性に対してアンビバレントだったと知った。そこには当時の社会事情なども複雑に絡んでいたようだ。」「どうしてキリスト教と父性的男性優位の価値観とがこんなに強く結びついてしまったのか。なぜ女性がこんなに抑圧され，苦しまなければならなくなったのか。私の育った教会のあり方は，現実に生きる人間の苦しみ，魂の問題に応えられていなかったと思う。そしてたぶん日本的な変な精神文化と西洋キリスト教の父性的なものとが捩れ合って，みなそれに無意識でいたため，自分は本来あったはずの神との結びつきさえ断たれ，このように苦しみを背負わされてしまった。」（#49）「洗礼式の前夜，（会ったことの無い）曽祖父のイメージが沸いてきた。きっと曽祖父は何かに絶望し苦しんでいたに違いない。キリスト教と出会って救われたに違いない。けれども遺り残したものもたくさんあって，それを私たちに託したんだと感じた。今から新たな

別の宗教に入って，一歩を進めるより，曽祖父，祖父，そして両親と歩み進めた道からさらに先へ進むことが，私に与えられた運命だと思う。ただ，私にはかつての様に素直に丸呑みするのではなく，ある程度距離を保って，批判的に見ていく姿勢もどうしても必要。それがないと苦しくなってきてしまう。信仰者として，一方で聖書やキリスト教史について，学問的に追求して行く姿勢を貫きたい。」(#51)「日本人として，仏教や神道などの宗教性も否定しないで生きて行きたい。外面的には以前のような教会生活，信仰生活を送ることはないかもしれない。それを堕落や背教行為と取る人もいるかもしれないが，むしろ曽祖父からの思い，代々継承してきた信仰を受け継ぐために形を変えざるを得なかったんだと思っている。」(#51)「初めはこんなところ（相談室）は来たくなかった。でも来ないでいたらどうなっていたか。自分のことここまで話せたのは初めて。性の問題についてはここで話せていたから，神父とも話す勇気が出た。神父は『性という字は，心と生という字からできている。心で生きる，心が生かすという意味がある美しい文字だ。性は裏腹なものの入り混じった複合的な存在であり，一つの奥義と弱さ，苦しみと喜び，肉と霊の交錯してるところ。心も体もすべてに共鳴するような全体的な喜びが感じられる場。肉の中にある霊的なもの，人間の中の神秘的なものです。』と話してくれた。まさに性のことを通して初めて自分の弱さ，傲慢さ，無力さを身をもって分かったし，底の底に落ち込んだとき，神を感じることができた。（大学での7年間は）ずいぶん長くかかってしまったし，簡単にいいとか悪いとか言えないし，今も気持ち的には複雑だけど，意味のある期間だった。以前のClとは明らかに違う。何よりも今の自分が好き。異性とは相変わらず距離感が難しかったり，変な固い癖が出たりぎこちないが，以前よりずっと関係を楽しめるようになってきている。」(#52)

考察

1．家族の歴史，プロテスタント系クリスチャンであること

Clは明治時代に外国人宣教師の導きで入信した母方曽祖父から4代続く，クリスチャンの一家の中で，通常の日本人とはかなり異なる精神的な土壌を背景に生まれ育っている。

Clの所属していた教派は，明治初期に西洋から入ってきたプロテスタント系キリスト教を源に持ち，ドイツ系の神学を強く信奉していたとのこと。プロテスタント信仰の特徴として特に顕著なのは，合理化，知性化であろう。プロテスタントは宗教改革によって，「世界の呪術からの解放」を目指した結果，中世カトリシズムの神秘と魔術，不可視の世界から信仰を切り離し，「かつてみない内面的な孤独化」(Weber,M., 1905) をもたらしてしまった。そしてこのような孤独な個人が，聖職者や聖人といった慰めの源泉を持たないまま，自分の運命に対して責任を担わなければならなくなった。(Mullins,M, 1998) これは心理学的に言えば，無意識や象徴性，元型的イメージとの制度化された，安全で密な関わりやルートが絶たれてしまうことを意味している。そして心の一部分でしかない小さな自我は，知性化による防護壁が崩れたときには，莫大な領域と力を湛えた無意識に直接立ち向かう危険に晒されやすいことも意味する。(Jung,C.G, 1938, 高橋2005)

加えて明治初期に入ってきた外国人宣教師たちは，キリスト教を布教するに当たり，日本的な宗教的土壌を低く見て否定し，そこにキリスト教を入れ込もうとした歴史がある。それに対して意義を唱えて，欧米のキリスト教から離れて，背教徒となったり，土着化したキリスト教の一派を立ち上げる日本人も現れたものの，今も「正統派」にはこの傾向は根強く残っていると思われる。(武田，1967，1973／Mullins,M, 1998) Clの両親や教会も，信仰を守るために，日本的な宗教性を否定してきたとのこと。

このことが，Clの内面生活にどのような苦しみをもたらしたのであろうか。#14でClは七五三のエピソードが語られられた際，自分のことを「日本人として根無し草」と表現していた。ここで着物が日本人としてのアイデンティティを象徴するものとして，Clに深く捉えられていたことは，印象的である。Clの母親も当時としては通常よりも西欧化された文化に育っていた人のようだが，それでも今よりもまだ，着物を日常生活の中で身につける機会がある時代であった。それは日本的な生活習慣と密接なつながりがまだ保たれていたことも意味していたのではないか。日本人の宗教性は，多元主義的，習合的であり，何らかの中心に向かうのではく，神仏習合的空間に拡散して行くありようが強い。よって特定の宗教にのめりこんだり，何らかの中心に向かうのではなく，伝統的に日本人は日常生活や生活習慣，文化の中に，宗教性を上手に織り込んで生きてきた。(河合 et al, 1997) すなわち，こうした日常生活の積み重ねの中で，母親の世代では特別に意識することも無く，クリスチャンでありながらも日本人としての自然な信仰心や感覚から切り離されずに，アイデンティティが養われていたのではないだろうか。しかしClの世代になるとだいぶ事情は異なってくる。日常生活の西欧化が一段と進み，着物を日常的に身につけるような習慣も激減し，もはや七五三と成人式以外で身に着ける機会はほぼなくなってしまった。成人式は特に宗教との結びつきも無く，単なるイベントと化して，儀式としての象徴的な力は失われてしまっている。しかし，少なくともまだ七五三には子供の成長と健康を感謝して，神社へ詣でるという，日本的な宗教性に触れる儀式としての機能を残している。しかもこの時に子供（特に女の子）に民族衣装としての着物を着せるのである。Clが七五三の体験を欠いたことで，意識せざるを得なかった問題から，女性にとって，生まれ育った土地（祖霊）・文化との深いつながりを持つことの意味と，民族衣装としての着物のもつ日本人固有の精神性，アイデンティティとの深いかかわりを，筆者も改めて考えさせられた。「根無し草」という表現に，七五三をはじめ，それに集約された日本的な祭事や宗教性を否定され，根源的な土壌から切り離されて生きることを余儀なくされてきた，Clの精神的な状況が見事に言い表されている。

2．起爆剤としての性，ヌミノースとしての性

Clにとって性は何を意味していたのだろうか。Clによれば，両親は意識的にはことさら厳しく宗教教育や，倫理的な教育を施したというわけでもないとのこと。母親は朗らかで明るく，父親も穏やかで受容的な，どちらかというと，母性的な人柄だとのことである。両親とも性的な抑圧の強い人であったということではあるが，Clの場合は，プロテスタント信仰による，知性化・合理化傾向の強い精神文化に晒されて，日本人でありながら，かなり西洋的なアニムス的な父性を取り入れて成長したと思われる。このアニムス的な父性を内面化し，強く自分を抑圧・コントロールして，内外ともに「固い」殻を作って生きていたようである。高校時代までClにとってこのアニムス的な力は，多少窮屈な部分はありながらも，思春期の混乱から身を守る堅い殻として機能していたと思われる。しかし一方で，Cl本来の内的なバイタリティーやエネルギーからも切り離されることとなり，自分は何をしたいのか，「進路をどう決めていいか，分からない」ような意識の枯渇と無気力の状況が，大学進学を考える，高校の段階で始まっていたと考えられる。大学生になって親元を離れ，心身ともに自立の時を迎えて，まさに「自分らしさ」をどう見出し，育てていくかが問題となってきた時に，それはさらに否定的な形を取って，主体的な生命力を強く抑圧し，Clの内面を苦しめていたと想像される。

新たに大学生活が始まり，実家を離れて外側の枠組みが緩み始めた頃，丈との出会いと別れのトラブルが起こるべくして起こっている。そ

れはClにとっては一方的に始まり，しかも相手から振られ終わりを告げるような大きな挫折の経験であり，自尊心が傷つき，本格的な無気力が始まるきっかけとなった。Clはそれまで，理想的なクリスチャンホームを築くため「信仰に従順に従い」，清く，結婚までは処女を守り抜く態度を何とか貫こうと生きてきた。おそらく母親の代までは，このような固い殻は守りとしてうまく機能してきたものと考えられるが，時代の変化の影響や，何よりもClの中で，自分の家の文化にはない新しい可能性が芽生え始めていたため，Clの無意識下では，この可能性を生かすべく，出口を求めて，殻を打破しようとするエネルギーが渦巻いていたのではないだろうか。

最初に付き合うことになった丈は「派手で軽くて，全く好みでもな」い，しかも「家庭的に複雑」な人物であったとのことだが，Clのこれまでの文化，価値観とは異なる異性のとの出会いに，Clの無意識，とりわけ抑圧され，生きて来れなかった可能性がまだ粗野な影となって投影され，「引っ張られるように」惹きつけられて行ったものと思われる。この関係は長くは続かなかったとは言え，性的な関係の入り口に立ち「妙な気持ち」を味わい，Clの内面は大いに揺さぶられることになる。

次に現れたセトが南米の人であることも象徴的である。Clのさらに深い未知の内面的な部分が投影される相手を選んでいる。人間的には「丈よりも落ち着いていて，ずっと包容力のある人で，リードされ守られている感じ」の持てる，より成熟した男性セトと，「性に対する抗えない魅力」に引きずられて，さらに深い関わりの中に入っていくことになる。一方でこれは，自分自身のコントロールを失う無力感，罪悪感を伴い，Clをさらに打ちのめす体験となる。Qualls-corbet,N.（2002）は，聖なるものは，性的なものと互いに関係し合っていること，聖なるもの，身体の中に閉じ込められた「神の力」は，知的にのみ理解されるものではなく，身体の中で感じ，遭遇しなければならないこと，そしてその体験は，まさにOtt,R（1917）の言う，ヌミノースとの出会いそのものであると指摘している。丈やセトとの出会いを通じ，引き込まれていった性の体験は，Clのアニムスの否定的な力，知性化の固い殻を破る起爆剤として働き，その後の神のイメージや，Cl自身に対する考え方を決定的に変えてしまった。Jung,C.G（1938,1964）は，ヌミノースの体験が，その人間に何らかの意識や態度の変化をもたらすことを指摘している。最終回#52で，神父から与えたれた言葉として集約される形で，性についての神秘性が，非常に美しい象徴的な表現を取って語られていたように，まさにClにとって，初めのうちは「信仰の躓き」としか捉えられなかった性の体験は，無意識との出会いをもたらし（Hillman,J.1967），「神の力」との遭遇，聖性へ通じるヌミノースの体験を導くものとしての豊かな意味をもつものであったと言えよう。

3．夢と全体のプロセスとの関わり

性の体験によって，破られた固い殻は，その後に見た夢１の「舗装されたような固い地面」に象徴され，割れた地面から様々な象徴が「すごい勢いで噴出」する。これはClの内奥深くに閉じ込められてきたエネルギーや，Cl本来の感性などが様々な象徴の形を取って，噴出していることも指し示しているかのようである。しかしこの時は噴出する勢いが早すぎて，まだ一つ一つが何を表し，意味しているのかもつかむことができない。

そして夢２へと続いて，まず女性性の問題に取り組むこととなる。この夢を通じ，初めて，女性としていかに，大切なエロス（血の通った関係性を結ぶための力）が抑圧されて来ざるを得なかったかを，意識化できるようになって行く。“curse”という発音は，聞いていて非常に生々しく迫ってくるもので，Clのみならず，多くの女性が代々背負わされ，苦しんできた思いそのものが代表されて，叫びとなって表現され

ているような迫力を，この夢の報告を聞いていて，筆者も女性の一人として強く感じたことを覚えている。

この夢を契機としてさらにClは，育ってきた教会の抱えている問題へ意識化が促されてゆく。特に「信仰」の大儀名文のもと，習慣的に理不尽に押し付けられ，抑圧されてきた女性への人間性否定の根強い傾向に，意識の光を当て，そのことに対する怒りの感情を体験できるようになる。

そしてこれは，本来の信仰の本質的な事柄ではなく，むしろ長い歴史の中で，人間的な限界や弱さ，偏見，慣習，そこから来るゆがみから形作られてきたものであることに，鋭く気づいていく。しかもそれがあたかも本質であるかのような，巧妙な仕掛けで，素直で無防備であったClの内面に植え込み，「愛情」や「隣人愛」「宗教教育」という名の縄目で縛り，反論も否定も許さない二重拘束によるゆがんだ関係に絡み取られてきたことにまで意識のメスを入れてゆく。そうして初めてこれらの呪縛から自由になって，日本人として当たり前に持っていた自然な宗教性との関係を回復してゆく。

このようなプロセスを経て後，カトリックの信仰講座に参加し，そこで新たな信仰の導き手となる神父に出会うのも象徴的である。Clは生まれ育った教会を離れて，一時仏教や，その他の宗教に，道を見出そうと試行錯誤した時期もあったが，それらには満足できずに，やはりキリスト教に強い必然性を感じているところがあった。無意識の象徴的なエネルギーが生き始めると同時に，日本人としてのアイデンティティをも取り戻しつつあった時に，プロテスタントに比べてはるかに日本人の土着の宗教性に親和性を持つカトリックは，Clにとって新たな居場所としての吸引力持っていたのではないだろうか。そして夢3で，それの内面の動きを確認するかのような夢が報告されるのである。しかし続く夢4では，難民としてのClが登場する。難民の象徴性についてQualls-corbet（2002）は「これまでの安全な避難所を去り，慣れ親しんだ安楽や社会的地位も持たずに，未知の道を進み始めること」を意味しており，「これは個性化の道と似ている」と述べている。カトリックの儀式に馴染めないことなどから，Clにも少し意識化されてはいたが，どうやらカトリック教会も，Clの一時的な居場所とはなり得ても，安住の地とはなりえず，さらにClなりの内面的な居場所を求めて，道を歩み進めなければならないことを暗示しているようである。一時的に身を寄せた避難所の天井に，「ルネサンスの宗教画が剥がされたような後があった」という非常に重要なイメージも，この夢の後半の中で報告されている。カトリックの神父の導きと助けで，自分自身の中にあって，自分を脅かし続けてきた偶像に気づく機会が与えらることになった。その「造られた神のイメージ」の正体に気づいて，距離を取れるようになることは，新たな解放をClにもたらすのだが，同時に，慣れ親しんできた，期待通りの，「神のイメージが剥がされ」る体験をも味わうことを意味し，その苦痛と，これまでの支えを失うという不安も語られる。(#33)，ヌミノース体験のもたらす，すざまじさ，聖性のもつ恐ろしさ，それに遭遇した人間の味わわざるを得ない痛ましさ，まさにその二律背反を，筆者も痛感させられた。

そして夢5でClはついにラストエンペラーとなって，生まれて初めて紫禁城を，完全に出る決定的なイメージが報告される。紫禁城はClが語っていたように，プロテスタント的な信仰，強い知性化の象徴である。この城がいかに大きくて，堅固なものであったか，出ることによってはじめて気づかされる。ここを出て行くことがどれほど大変なことであったか，それは映画のラストエンペラーのその後の姿さながらであった。夢4から5に至る時期は，日常的にも非常に大変な時期であり，一見するとpsychoticなレベルにまで，落ち込んだかのような，心身の状態に見舞われ，筆者としても非常に心配で緊張を強いられた。クリニック受診も勧めたが，

Clは「自分は病気ではない」ことを理由に，これをかたくなに拒否し続けていた。今から考えると，Clも語っているように，これは「象徴的な死」を体験し尽くしていた時期であった。そこから新たに再生し始めたときに，黙想会で，神父に「おんぶしてもらい」，体ごと抱きとめ，受けとめてもらえたことが，新生児が母親の腕に抱かれるような体験となったに違いない。そしてこれまでのプロテスタント信仰に最も欠けていた，母性的な側面，関係をつなぐエロス的な側面へClの内的エネルギーがつながり，その帰り道でClの内面に浮かんだミケランジェロの「ピエタ」のマリアのように，Clを抱くキリストのイメージへと結実する。つまり丈やセトに投影されてきたイメージが，ここでキリストという元型的イメージへと変容するのである。

もちろんClはキリストについて，幼い頃から教えられ，理解してはいたはずである。しかしそれは知的なものにとどまり，生き生きとClに働きかけてくる生きたイメージとして体験されて来なかったのではないか。元型は人間の生を基礎付けているものであるが，ただ存在しているだけでは，生きたものとはならない。人間の自我とうまく呼応し合い，関わり合うことによって，初めてその力が生き生きと我々に働き，その関係の中で我々人間の生き方が決定されてくる。(織田，1989)

Clはこの決定的な体験を経て，カトリックへの改宗を決意することとなった。Clにとって，これはClを抱きとめるキリストのイメージに結実した，元型的イメージ，活きた神との関わりの中に入っていく道へと，方向転換していく，「回心」の自己表明であり，また，カトリックへと「形を変え」ることで，「曽祖父から代々継承してきた信仰を受け継ぎ」，さらにこの信仰を深化させる道を選ぶ決意表明の儀式でもあった。

この後Clがどのような道をたどることになるのか，その後夢6ではまた難民のイメージが報告され，今後もまだ先が見えない自己実現の道が続いていくことを暗示しているかのようである。まだまたプロセス途上の感は否めなかったが，ここでClは大学卒業の時を迎え，学生相談の枠組みとしては，ここまでの時点で面接も終結を迎えることとなった。

しかし，新たな歩みに備え，現実的にはプロテスタント教育によって育まれた知性化の力を生かして，「距離を保って学問的に追求していく姿勢」と，「信仰者として」の姿勢とのバランスを取るスタンスを保ちながら進んでいくことを選択し，その歩みも「ユニセフ親善大使の黒柳徹子」がついてきてくれるイメージが報告されていることから（現実的にも神父との関わりは卒後も継続されることが大きいだろう），プロテスタント時代の「内面的な孤独」とは明らかに違うものになっていきそうな可能性を見届けての終結となった。

4．まとめ—日本人とキリスト教—

以上，日本人にとってのキリスト教信仰の継承と，深化，成熟という視点から，Clのプロセスを詳細に振り返り，検討してきた。異なる文化で生まれた宗教を受け入れ，自分のものに血肉化していくこと，その中から新たな自我を育み，生み出して行くことの豊かさと，すざまじさを教えられたケースであった。Clの力をひたすら信じてついて行くのみであったが，途上では非常に危険を感じる時期もあり（特にⅢ期の後半からⅣ期），筆者の力量で大丈夫なのか，悩むことも多々あった。しかしClが基本的には健康な自我の持ち主あったこと，適切な時期に神父との関わりを持ち，信仰的に太いパイプがつながっていたために，筆者としては非常に心強かった。（逆に言えば，このようなパイプができたからこそ，Clは思い切ってさらに内奥へと歩みを進めて行ったのかもしれないが）そして何よりも自分のプロセスを信頼して，進み続けようとした，Clの姿勢と力こそが，筆者にとっての大きな支えであったと思う。今振り返ると，これこそが代々引き継がれて，育まれ蓄え

られてきた信仰の力であり，Clをして元型との生きた交流を新たに可能にさせ，元型的イメージの守りの中で，危険なイニシエーションを乗り越えさせることを可能にしてくれたのだろう。洗礼式の前夜，曽祖父のイメージが立ち現れてきた時，そのことをClは初めて意識化し，洗礼式に臨んで，自分のこととして選びなおして，これからもこの信仰を継承していくことを決意するのである。

本来キリスト教の信仰とは，所属している民族や文化から個人を引き離すのではなく，民族文化の個別性・特殊性に深く根ざし，その精神構造を内側から新しくしていく価値観，エネルギー，生命力を生み出していくものであり，ユニークな文化をより個性的に創造・発展させながら，普遍性に向かって開花させていくことを可能にするものでなければならない。日本人がキリスト教信者になるということは，つまり独自に個性的な日本人であるクリスチャンになるということである。このためには正統的，伝統的な宗教感覚の枠組みからは，一見，非宗教的のように見えるが，実は真に宗教的であるものを探っていこうとする信仰の斬新な把握と，自分自身の内面深くに降りてキリストと出会う道を探り求めること（武田，1973）が求められているのだが，既存の正統派キリスト教教会の中で，それを実現させるには，まだまだ困難な状況があるのだろう。だからこそClは，カウンセリングという新たな枠組みを必要とし，カトリックの神父との個人的な関わりは持てるようになっても，カトリックの教会コミュニティへ入っていくことには消極的であったのだろう。

Clが抱えねばならなかった問題と，それを乗り越えるためにたどったプロセスは，既成の宗教が力を失い，西欧合理主義と古来の日本的精神文化との相克に晒され，「内面的な孤独」の中で生きる現代の我々日本人にとっても，いかにして自分の内奥にある宗教性に触れ，元型的イメージとの生きた関わりを回復して行ったらよいのかという問題に通じる，多くの示唆を与えてくれるもののように思えてならない。

以上今だ考察し尽せない，豊かなマテリアルがたくさん残っていることを痛感しながら，それは今後の課題として，ここで本論分を閉じることとする。

最後に本論分作成を了承してくださったClのKさんに，心よりの敬意と感謝を表したい。ちなみにKさんは現在結婚されて，お子さんにも恵まれて，元気に暮らしておられるとのことである。

文献

Hillman,J.1967：Inserch :Psychology and Religion,
樋口和彦・武田憲道訳，1990：内的世界への探求，創元社
Jung,C.G.1921：Psychologishe Typen,
林道義訳，1987：タイプ論，みすず書房
Jung,C.G.1938：Psychology and Religion,
村本詔司訳，1989：心理学と宗教，人文書院
Jung,C.G，et al，1964：Man and His Symbols，河合隼雄訳1975：無意識の接近，河合隼雄監訳，人間と象徴，河出書房
河合隼雄，村上陽一郎共同編集，1997：内なるものとしての宗教，岩波書店
Otto,R.1917：Das Heilige，山谷省吾訳，1968：聖なるもの，岩波書店
高橋　原，2005：ユングの宗教論―キリスト教神話の再生―，専修大学出版局
武田清子，1967：土着と背教，新教出版社
武田清子，1973：背教者の系譜，岩波新書
Mullins,M,R，1998：Christianity made in Japan
:a study of indigenous movements
高橋恵訳　2005：メイド・イン・ジャパンのキリスト教　トランスビュー
織田尚生，1989年3月3日，山王教育研究所，理論と技法Ⅲ「元型について」の中で語られた。
Qualls-corbet,N，2002：Awakening Woman，Dreams and individuation
山愛美・岸本寛史訳，2003：「女性」の目覚め，新曜社
Weber,Max，1905：Die protestantische Ethik und der 'Geist' des Kapitalismus
大塚久雄訳：プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神，1993，岩波文庫